

保育における幼児の描画に関する研究の動向と展望

その他のタイトル	A Review of Studies Related to Children's Drawing Activities in Early-Childhood Care and Education
著者	堀田 由加里
雑誌名	東京大学大学院教育学研究科紀要
巻	59
ページ	253-260
発行年	2020-03-30
URL	http://doi.org/10.15083/00079202

保育における幼児の描画に関する研究の動向と展望

教職開発コース 堀田 由加里

A Review of Studies Related to Children's Drawing Activities in Early-Childhood Care and Education

Yukari HOTTA

Drawing is a popular activity with children to serve various purposes during their play or other everyday activities in early childhood care and education settings. This paper reviews the research on children's drawings from the following viewpoints: (1) individual development through "intellectually realistic" and "visual perception" and (2) the sociocultural approach focusing on "symbolic systems" and a "communication system" in drawing activities based on an overview of international and domestic empirical research. This review reveals that the drawing process depends on peer interactions and the context in which it takes place, and they involve multimodal expressions, such as talking, using graphic symbols, and nonverbal communication.

目次

- 1 問題と目的
 - A 保育における描画研究の意義
 - B 知的リアリズムとしての描画
 - C 知覚・感覚的行為としての描画
 - D 幼児の描画を捉える新しい視座
- 2 社会文化的アプローチによる幼児の描画研究
 - A シンボル・システムとしての描画活動
 - B コミュニケーションと描画活動
 - C 遊びにおける描画活動
 - D 国内の社会文化的アプローチからの描画研究
- 3 まとめと今後の展望

1 問題と目的

A 保育における描画研究の意義

日本の保育実践の基本方針を定める、幼稚園教育要領および保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「表現」は、平成元年に「幼児の豊かな感性を育て、自分の思いを表現する意欲や創造性を豊かにする」という観点から作成された領域である。平成20年幼稚園教育要領において、この「表現」の「内容の取り扱い」に「他の子どもの表現に触れられるように配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」という文言

が新たに加えられた（文部科学省、2008）。このことから、幼児の豊かな表現過程における幼児同士の関わりがより重視されるようになってきたことがわかる。

日本の戦後以降の描画研究において、描画から子どもの内面を理解しようとする実証的な知見が蓄積されてきた。その背景に、1952年に創立された創造美育協会の影響があり（太田他、2014）、そこでは「心の中を思いきり」「自由に表現させる」という教育観により、描画を自己の内側から外への感情の表れと捉える潮流がうみだされてきた（花篤、1999）。しかし、こうした創美の影響により、現在の美術教育においても「自己の内的世界・内的イメージの表出としての表現論」が重視される傾向にあり、目前の素材を元に想像を働かせる表現活動、つまり環境から想像性を喚起するという観点が軽視されていると指摘されている（上野、1995）。

一方、諸外国では、Vygotskyを嚆矢とする社会文化的アプローチの立場から、子どもが周囲の他者やモノとの相互作用により表現を生成していく描画行為の過程に焦点を置き、重要な知見が見いだされてきた。子どもは、親、仲間、兄弟や教師などの他者との相互作用を通して（Daniels、2001）、さらには遊びを通して（Vygotsky、1976）、様々なスキルを発達させ、新たな表現を習得していく。こうした知見を踏まえると、日常の園での描画活動では、環境との関わりの中に、社会的・創造的能力の発達を促す可能性が見いだせるとい

える。また、幼児の描画過程においては、身振りや歌、おしゃべりなど、描画行為とは別の行為が同時進行している (Coates, 2006; Wood & Hall, 2011; Kolbe, 2005)。これらの描画に伴う言語的行為や非言語的行為は、描画過程における意味生成を理解する上で、重要な要素であるといえる。

以上、近年、保育において幼児が他者と関わり合いながら描画表現を展開させていく過程が重視されている中、諸外国で展開されてきた社会文化的アプローチによる幼児の描画研究から、日本の文脈に適した新たな視座を得られると考える。そこで、本稿では、まず、幼児の描画発達研究の中で、知的リアリズムと知覚・感覚的行為の観点による描画研究の知見を概観し、その課題を踏まえた上で、幼児の描画研究を行う意義について論じる。そして、新たな視座としての社会文化的アプローチの立場からの幼児の描画研究に関して、社会文化的背景の異なる海外と日本で取り組まれてきた実証研究の整理を踏まえ、日本の保育における幼児の描画について基礎的研究を行う上での展望を見出す。

なお、本稿では、秋田 (2016) に倣い「保育」を「乳幼児期を中心にし、園で行う集団の営み」(p.5) として用いる。また、就学前の幼児期の子どもは「幼児」、乳幼児期から児童期までの子どもを含む場合は「子ども」と表記する。

B 知的リアリズムとしての描画

これまでの描画の発達研究においては、Luquet (1927) を嚆矢とした描画発達段階論が極めて大きな影響を持ち続けてきた (Nixon & Adwinkle, 2005)。特に、幼児期後期から児童期始めにかけての子どもの描画表現を、「知的リアリズム (intellectual realism)」から「視覚的リアリズム (visual realism)」への移行として特徴づける視座は、美術教育の実践において根強く定着している。5～7歳は、対象について知っていることを描き、実際には見えていない要素まで絵に描き込む。こうした、描画特性を Luquet (1927) は見え通りに描く大人の「視覚的リアリズム」に対し、子どもの「知的リアリズム」とする。この「知的リアリズム」の段階において描画は、子どもの心的イメージの反映、つまり実物の写しではなく「心のなかで変形され、複雑な再考性の過程を経た創造的な産物」としての内的モデルの存在によって成り立つと捉えられる (Piaget, 1956)。こうした Luquet の描画発達段階論や Piaget の描画を知的能力の反映として捉える視座

は、描画研究の土台として多方面で展開してきた。しかし、同時に、子どもの特性や環境との相互作用を対象から外し、一方向的な認知発達として捉える考え方として批判の対象にもなってきた (Wallon, 1990)。

佐藤・長橋 (2009) は、「知的リアリズム」は時間を描くことであり「視覚的リアリズム」は空間を描くことという相違性を強調し、この二分法の問題点を論じている。佐藤らは、5～6歳が体験画を描く過程を検討し、幼児が一枚の紙の上に幾つもの出来事を重ねて描くという多層的表現を行い、自分の経験を「物語」として再現する順序性を明らかにしている。そして、幼児にとって、体験したこと、感動したことを描画として表現することが表現行為の本質であり、それは決して視覚的に共有可能なことだけを目指した、平面遠近法で表現することが目的なのではないと論じている。

佐藤らの知見からも、幼児の描画には、従来のリアリズムの視点からでは捉え切れない、生活の中でうまれる心の機微や息づかいを含んだ側面があることがわかる。このように、幼児の描画は日常生活と連続したものであることを踏まえると、描画活動における内的発達を従来のリアリズム観から一元的な枠組みで捉えるのではなく、幼児の置かれた社会文化的文脈から幼児の変容過程の実体を明らかにする必要性があるといえる。

C 知覚・感覚的行為としての描画

前項の知的リアリズムでは、描画を通して幼児期から児童期にかけての子どもの内的発達を理解する立場である。一方で、子どもの描画それ自体、つまり画面上に描かれる形態や視覚情報の特質と子どもの知覚や感覚とがどのように関連があるのかという、描画を知覚・感覚的行為として捉える研究が、描画発達研究の系譜の中で蓄積されてきた。そうした研究者の代表が Arnheim である。その著書『美術と視覚』(1954) の中で、視知覚のゲシュタルト理論を子どもの描画に敷衍し、美術は「認知」の性格をもつという観点を提唱した。

Arnheim は、視覚的思考という概念を提示し、知覚の基本過程は、単なる受動的な記録ではなく構造を把握する創造的な行為であり、描画表現は知覚概念の模写でも操作でもなく、特定の媒体を用いて知覚概念の等価物、つまり「構造的等価物」を作り出すことであるとする。そして、バランス、対比、対称、緊張という描画の内的構造を論じる枠組みを提示し、子ど

もの描画を「構成しながら知ることである」(Parsons, 1998)と捉え、その心的な活動過程を強調した。

発達に関していえば、Arnheimは、先述のLuquetの「知的リアリズム」を「主知説」と批判し、「幼児にとっては、ものはみえるとおりに、きこえるとおりに、うごくとおりに、ものである。もちろん、子どもも考えるし問題を解決する。…しかし、この思考、問題解決、概括は、知的抽象の水準においてよりも、むしろ主として知覚的領域の中で行われるのである」と説明している。そして、知覚能力は生得的に与えられたものであり、成長に伴い、全体的なものから特殊なものへと次第に分化していくと捉える。

こうした知覚・感覚的行為を軸とした発達観は、これまで過小評価されてきた再現性の枠組みからはみ出ず「非再現的」なスクリブル（なぐり描き）にも発達の意味を見出した。Arnheimは、初期のスクリブルは実在の世界の「再現」ではなく、運動衝動が優位に立つ「表現」であるととし、描画から得られる運動快感は、再現的描画が描けるようになった後でさえ、依然として重要であると指摘している。また、Arnheimの研究の流れを受け継ぐKellogg (1969)も、子どもの描画は「運動的な楽しみ」と「視覚的な楽しみ」に分けられ、乳児の描画にも生得的で普遍的な「原初的な視覚秩序」があることを主張した。さらに、知覚心理学領域のGibson (1979)も、「子どもにおいては描くことも書くことも、原初的描画行為から発達するとし、道具を表面の上に動かすことは、感じられるし、見えるものである」として、画面の上に道具の連続的な記録を見ること、運動感覚を見て感じ取るという「視覚的運動感覚」を重視する。

このように、知覚能力や視覚的思考の概念においては、子どもは見たものを描くというテーゼを打ち立て、子どもの描画を知覚、表現、認知発達の面から捉える考察を統一した包括的な理論的説明を与えた(Thomas & Silk, 1990)。そして、従来の「再現」の枠組から解き放ち、描画というものの存在意義の比重を「見るという過程」から「描くという過程」へと大きく方向転換させた(岩田, 1997)。しかし、これまでのところ、幼児の描画研究においてはArnheimやGibsonが注意深く検討すべきであると主張した、運動衝動が優位に立つ描画表現に関する心理学的検証が十分に蓄積されていないのが実情である。

D 幼児の描画を捉える新しい視座

こうした発達の視座から幼児の描画を捉える研究

に対して、Vygotskyに始まる社会文化的アプローチから、幼児の描画の実態を日常の文脈に即して検証する研究が近年蓄積されている。Costall (1995)は「子ども自身の言葉において子どもの描画を捉えるアプローチ」の必要性を説き、幼児の描画研究において、対象を描画それ自体に限定するのではなく、描くときに生起する事象にその焦点を移行させ、描画を媒介に幼児がどのような行為をしているのか、その意味は何か、幼児の実際の姿から捉えることの重要性について述べている。こうした考え方の元、幼児の描画を「対象中心」や「観察者中心」から「描画行為中心」として捉え、幼児の日常的な描画行為に関する検討が重ねられてきた(Matthews, 1999)。

幼児の描画行為を、仲間との遊びや物語の共有行為として捉えるCox (2005)は、観察研究により3歳児が仲間と描画を行う際、常に偶発的に周囲で生起する事象に影響を受けながら、描画内容を変容させ新たなテーマを生成すること明らかにしている。また、幼児は家庭や園において、保育者・仲間・兄弟・親などの多様な他者との関わりにおいて、その相手に応じて異なる質の相互作用が生起し、描画表現の展開にも差異が生じることが示されている(Daniels, 2001)。これらの社会文化的アプローチの立場から幼児の描画行為を捉える研究は、描画に表出される幼児の思いを社会文化的状況における相互作用の中に推察できることを示し、一方向的な描画発達の枠組みからでは捉えきれない幼児の他者や環境との関わりの世界を浮き彫りにしている。

以上、2つの描画発達研究を概観した上で、保育における幼児の描画研究の意義を、社会文化的アプローチによる描画研究の中に見出した。日本では、こうした理論を元にした実証研究ということになると未だその数は少ない。そこで、本稿ではまず国際的な動向に触れ、その後日本における重要な研究に言及するという形をとる。

2 社会文化的アプローチによる幼児の描画研究

A シンボル・システムとしての描画活動

子どもは、日常の他者のふるまいや行為、問題解決などを観察し、それらの行動、態度、ニーズ、期待を解釈しながら、様々なシンボル・システムを媒介に、独自の意味と行為の方法を構築していく(Anning & Edwards, 1999; Rogoff, 2003)。ここでいうシンボル・システムとは、Goodman (1978)によると、話し言葉、

書き言葉、描画、ジェスチャー、視覚、デザイン、音楽のパターンであり、それが具現化した様式が、提示、表現、比喩、多義性である。これらのシンボル・システムは、自然に発生するのではなく、人によって事象の意味を記号化するためにつくられるものである。そして、シンボルの認識には、遭遇した状況や、それらを取りまく図式的関係、すなわち見る人の「精神のかまえ」で決定されるという。Gardner (1982) が、「子どもの描画はシンボル・システムとして認識され、そのように研究されるべき」と主張して以降、幼児の描画を、こうしたシンボル・システム論から捉える研究が蓄積されてきた (Callaghan, 1999; Poland & van Oers, 2007; Soundy & Drucker, 2010)。

Matthews (2003) は、シンボル・システム論に依拠し、2～7歳の描画活動における意味生成と記号的機能の形成過程について自然観察に基づき検討を行った。その結果、2～3歳は線や形を描く過程において、自分自身の身体の動きによって、記号が形作られることを認識し、初めは指、足、道具の動きによって生じるあらゆる形の変化を探索するが、その後、様々なツールや素材を試し、異なる意味を生成する記号形成を試みる。2～3歳の多くの場合、こうした意味付与は記号形成後に行われるが、年齢の発達に伴い描画内容を予告する形で事前に行うようになる。どちらの場合も、幼児の描画には、記号形成と意味生成との間の密接な関連が明らかにされてきた。

同時に、幼児にとって重要な他者から、受容や賞賛などのポジティブな応答を受けると、幼児はそれらを自身の描画に対する明確なメッセージと認識し、その相手に理解してもらうために記号の「再現」を試みる。そうした繰り返しの中、幼児は、特定の記号をシンボル・システムとして用いるように移行していく (Hope, 2008)。このように、幼児は、他者との関わりの中で、独自のシンボル・システムや記号論的コードを作成し、コミュニケーションの手段としての描画の意味を見出すようになる (Pinto et al., 2011)。

こうした描画活動における意味生成と記号形成について Hopperstad (2008) は、ノルウェーのプライマリースクールの5～6歳を対象に、幼児同士の相互作用に着目し検討を行った。その結果、相互作用に関するカテゴリには、(1)描かれた記号の意味について相互に伝え合う (2)記号の描画化における難しさの解決 (3)記号の描画化における探求 (4)描かれた記号についての判断という4つパターンを導出し、それぞれに描画の意味生成と記号形成に異なる影響を及ぼすことを明らか

にした。さらに、グループでの描画活動においては、幼児は自発的に観客の役割を引き受け、仲間の作る記号の意味を理解し、それを言語化し、支えることに興味を持つ。そうした他児の作る記号についての応答の多くは肯定的だが、批判的な内容であることもあり、批判的な応答を受けた幼児は、別の描画に転換する傾向にあるとし、幼児同士の相互作用により、幼児の記号形成と意味形成に方向性を付与することを示している。

このように、グループでの描画活動では、多様なパターンの相互作用が生起し、それらが記号形成と意味生成に影響を及ぼす。こうした知見を踏まえると、Van Oers (1997) が「教師は、『描画は公に話すべきではない私的な表現である』という考えを捨てなければならない」と主張するように、保育者は、時に幼児同士の関わりに参加し、描画の意味について互いに語ることを支え促す必要があるといえる。しかし同時に、保育者が幼児同士の相互作用を統制する可能性も孕んでおり (Anning & Ring, 2004)、そうした点を踏まえ、幼児の描画に対する興味関心を、大人が丁寧に聴き理解しようとする姿勢が重要であると考えられる。

B コミュニケーションと描画活動

描画は、子どもが他者とコミュニケーションをとるのに有用な視覚的言語として広く認識されている (Edwards et al., 1993; Kress, 2003; Brooks, 2009)。子どもにとって、言葉を用い自分の考えを表現することが困難な場合においても、描画はそうした話し言葉の制約を補完するのに有効である。この点に関して、Wright (2007) は、「コミュニケーション媒体としての言語は、私たちが考え、感じているすべてのものを表現するツールとしては不十分である。それを補完する形で、描画による物語遊びや芸術的表現は、複雑で多層的・象徴的・比喩的・形象的コミュニケーション媒体として、重要な意味形成の形式を提供する」(p. 24) と述べている。

実際、子どもは他者が自分の描画を理解できないと認識したり、図式的記号が適切でないと思うと、正しいメッセージを伝えるために、言葉による説明を追加する (Cox, 2005)。さらに、図式的記号に追加した言語的説明が相手の望む通りに表現できてきないと感じると、身振りや効果音などのさらなる追加的表現手段を用いるとされている (Hall, 2009)。このように、描画活動は、語り、歌、文章、効果音、身振り、動き、踊りなど、様々な並行する行為によって補完されるこ

とが多いため、マルチ・モーダルな活動として認識されている (Kress, 1997; Wright, 2007)。

描画活動におけるコミュニケーション機能を検証したPapandreou (2014) は、ギリシア・テサロニキの幼稚園4～6歳を対象に、グループでの描画活動の観察データから質的分析を行った。まず保育者から、おとぎ話の読み聞かせが行われた後、幼児に「読んだ話と関連するテーマ」をグループで描くよう教示がなされた。その結果、幼児同士が、話し言葉、表情、手振りなどの異なるモダリティを用いたコミュニケーションを通して、アイデアを共有し、記号と意味を共同構築していく過程が示された。描画活動序盤においては、記号は、身振りや表情の非言語的モダリティで表現され、相互に合意がなされた後は、描画の図式的記号が媒介となり活動が展開された。さらに、再度、細かな部分について言葉による話し合いが行われる。そこでは、描画によってアイデアを具現化したり、そのアイデアの細かな特徴を言葉で説明したりし、描画を精緻化させてく様子が示されている。このように、幼児同士がマルチ・モーダルな活動として描画活動を展開する中、幼児が協働して1つのテーマを生成していく過程が明らかにされている。

以上、幼児は、他者とコミュニケーションをとるために描画を用いる一方で、描画を生成するために別のコミュニケーション手段も持ちあわせている。その際に用いられるのは、言葉と描画の他に非言語的なモダリティがあり、それにより、補完的に意味生成が行なわれる。しかし、こうした描画活動における幼児の相互行為は、社会文化的文脈の影響を受けるとされ (Rogoff, 2003)、描画表現を重視する保育環境や、他者との安定的な関係性が成立している場合、さらには、描画活動がコミュニケーションや思考ツールとして認識され、促されている場合、幼児は多様な描画表現手段を活用するようになる (Anning & Ring, 2004)。したがって、保育における表現教育の可能性を拡張し、幼児の描画表現のレパートリーを引き出すために、適切な環境構成や描画活動に対する援助に関する研究がさらに展開することが期待される。

C 遊びにおける描画活動

幼児の描画は、伝統的に個人の表現形態として焦点が当てられ、複数の幼児が描画を行う際の遊びの要素には殆ど言及されてこなかった。しかし、幼児が仲間同士で描画を行うときには、おしゃべりをしたり、物語を語り、ジョークを共有したり、騒いだり、歌った

り、描いているものを演じたりし、遊びのような形態を取りながら、長時間の活動を維持する (Coates & Coates, 2006; Wood & Hall, 2011)。

Kukkonenら (2017) は、複数の幼児が協働的な描画活動の中でどのように共通の意味を創り、変容、展開させているのかを、ごっこ遊びのメタコミュニケーション理論に依拠し、カナダのプリスクールの4～5歳児を対象に検証を行った。その結果、意味を伝える追加的手段として、言語方略 (例：紹介、質問の明確化、拡張) とごっこ遊びに見られる非言語的方略 (身振り) を状況に応じて併用していることが示された。非言語的方略が主な場合、遊びの展開は並行的展開に陥りがちであるため、幼児はそこに言語方略を加えてテーマの合意に達しようと試みる。協働的な描画活動においては、このように、言語的導入や言語的賛同が共通テーマ生成やテーマ展開のために不可欠であり、その際、描画は合意のための視覚的媒体として機能する。さらに、身振りの使用は、自分のアイデアを表現する際の限定的な語彙力を補完するため機能することも指摘されている (Thomas, 2005)。こうした知見は、Göncü (1993) のごっこ遊びにおけるコミュニケーションの構造と類似しており、幼児同士の意味の共同構築やコミュニケーション・スキルの発達の意味を示していることから、オープンエンドの集団での描画活動の価値を見出しているといえる。

D 国内の社会文化的アプローチからの描画研究

近年、国内においても幼児の描画活動を社会文化的アプローチの立場から捉える実証的研究が取り組まれており、それらを大別すると以下3点に分類できる。

第1に、幼児同士の関わりに焦点を当てた研究である。5歳児の「協働」が成立する要因を検討した若山・岡花・一色・淡野 (2009) は、「他児描画の言語化」、「連想」、「模倣」、「描き足し」といった描画行為が、複数の幼児が協働して描画を完成させる要因であることを示している。そうした描画行為の中でも、特に、幼児間の「模倣」が創造の契機となることを、4～5歳児の観察研究から示されている (奥, 2004)。

また、堀田 (2018) は、5歳児の自由な遊びの時間での描画活動に関して、1年間の参与観察から、描画児に対する他児の応答行為の中に、(1)描画活動の展開に伴い、新たなテーマへ広げる「拡張」「提案」を行うこと、(2)複数幼児よりも2人で取り組む方が、他児の応答行為に多様性がある一方、複数幼児で取り組む場合には、描画行為の拡張へつながる応答行為を示す

傾向が高いという特徴を見出している。こうした幼児同士のやり取りの中では、(1)テーマの進展を促す明示的発話(監督の声)が、質問・依頼・感情の吐露などの多様な応答行為を通してなされること、(2)明示的発話と暗示的発話が描画活動の状況に応じて使い分けされていること、(3)幼児の役割が幼児間で固定化されず、互いに提案や指示を行うことが示されている(堀田, 2019b)。

さらに、描画活動における5歳児の相互行為は、仲間関係によって差異が生じること、すなわち、親密性の高い相手には描画時間や場を重視し、従うことの多い相手には相手の提案や指示を取り込み、親密性の低い相手には自分の思いを優先させる傾向が示されている。ただし、相手の描画意図を認識する過程で、親密性にかかわらず自己抑制の姿が見られるようになることも明らかにされている(堀田, 2019a)。

第2に、保育者による幼児への関わりに焦点を当てた研究である。藤原(2009)は、描画活動における5歳児の発話を保育者が聞き取り、メモを取るという保育方略が、幼児の描画を受け止める受容的態度と共感的理解に繋がり、幼児の描画表現と描画時の発話を豊かにする可能性を示唆している。また大橋(2016)は、5歳児の生活画の活動導入時に焦点を当て、保育者の援助の方略とその意図に関して参与観察をもとに分析し、導入時の保育者の援助には、「イメージの想起」「体験の意識化・共有の促進」「描画による体験の主体化」「具体化への方略」「具体的な注意事項の確認」など多様な方略が用いられていることを示している。

第3に、幼児と描画対象との関わりを検証する研究である。特に、具体的形象から何かをイメージする「見立て」に関する研究が蓄積され、「見立て」を介在に幼児の創造的な造形表現につながるものが実証的研究から示されている(上野, 1995; 若山, 2008; 島田, 2014)。

特に、園での一斉描画活動の導入時に、絵本を読み聞かせることによる、描画対象に対するイメージ喚起に関しての研究がなされている。濱田・堂野(2017)は、3~4歳児を対象に絵本の読み聞かせによる描画への効果検証を行い、その結果、日常的なリアルな事物(日常目にする一般的な形・姿の事物)が主人公の場合、擬人化した事物が主人公の場合より、1週間後の描画数が有意に多く、3~4歳児の描画発達を援助する手立てとして、リアルな事物を主人公とする絵本の読み聞かせ体験の有効性を見出している。また、馬場(2014)は、絵本の読み聞かせによるイメージ形成

について、ワークショップに参加した2~6歳児を対象に検証を行い、幼児の発達段階により描写力に相違はあるものの、絵本のイメージが幼児にとって鮮明であるほど、またそれが自分のことのように感じられるほど幼児の表現意欲が強くなり、表現という意味において発達による制約は解消されることを示唆している。さらに、大橋(2014)は対象物に対する共感性の働きに着目し、描画活動の前に、保育者がテーマとなる動物園の「ライオン」に対する共感的働きかけを「視点取得」、「ファンタジー」、「個人的苦痛」、「共感的関心」の4つの次元を段階的に伝え、それに対する3~4歳の反応を検討している。2つの異なる幼稚園で行われた実践をビデオで記録し、その導入部分の保育者と幼児の対話内容の比較を行った。その結果、幼児も保育者と同様の段階で、ライオンの気持ちを感じ取ろうとし(視点取得)、ライオンは人間の言葉を話したり理解したりする事ができる存在(ファンタジー)と捉え、そこから、ライオンの痛みを自らの苦痛と感じ(個人的苦痛)、自らの手で解消して元気にさせてあげたという愛他心に基づく援助行動(共感的関心)として、描画表現が喚起されることを示している。

以上、幼児の描画活動を社会文化的アプローチの立場から捉える国内における研究からは主に3点が示されている。第1に、幼児同士の関わりにおいて、幼児が他児の描画や言語的応答を取り込み、拡張しながら表出することが、創造的な描画表現につながるものが統制場面での検証や参与観察による録画データの検証から示されている。第2に、幼児と保育者との関わりにおいて、保育者の幼児に対する応答性の高さや、保育者が仲介し対象物と幼児をつなげることで、幼児の描画表現が豊かになることが主に観察研究のエピソード記述から質的に示されている。第3に、幼児と対象物との関わりにおいては、幼児の対象物に対するイメージの生成過程と描画の表出の仕方に関連性があることが、描画を対象とした分析や録画データの発話分析から示されている。

3 まとめと今後の展望

本稿では、従来の描画発達研究を整理し、そこで浮かび上がった課題を乗り越える新たな視座として社会文化的アプローチの立場によるシンボル・システムや遊び論に依拠する国内外の実証研究を概観してきた。これらを踏まえ、今後、日本の保育での描画研究を行う上での課題を整理する。

第1に、第2章B・C・Dにおける幼児同士の相互作用に関する研究では、主に描画に取り組む幼児に定位しており、他児が描画児とどのように関わり、それがどのように描画の深まりや広がりへと展開していくのかという、描画表現における他児の及ぼす影響に関して詳細が明らかにされていない。保育の描画場面において、幼児が描画に取り組む過程で、特定の他児に「ねえ、見て」と発話する際、その発話の宛名である他児が存在することでそこに「見て」はつくられ、意味が付与される。こうした観点から、描画児の表現過程において、描画の意味を共に生成する他児の存在は極めて重要であり、他児が担う役割と機能を明らかにすることが求められる。

第2に、第2章Aの記号形成と意味生成を対象にした研究では、描画の「完成形」を1つの指標として捉え、描画作品についての形態分析や描画それ自体の生成過程に焦点が当てられる傾向にある。しかし、Cox (2005) が「子どもにとって描画にその完成形は存在せず、描画を一定時間に渡って生起する進行中の行為」として捉える必要性を提唱するように、幼児同士の描画表現を幼児の描画行為の中に特定することが重要であるといえる。こうした観点により、幼児が環境に働きかけ、さらに環境からの応答により幼児の描画行為が変容していくその過程の連続体として、幼児の描画の実態を捉えることが可能であるといえる。

第3に、第2章Bでの幼児のマルチ・モーダルな活動としての描画表現に関する研究では、幼児同士の応答連鎖が描画活動の中でどのように展開し相互理解がつけられるのか、さらにその過程にはどのような方法がレパートリーとしてあって、前後のどのような文脈の中で使用されているのかという点について踏み込んだ知見が示されていない。そのため、幼児間の相互行為が立ち現れる瞬間の過程に焦点をあて、どのような即興的やり取りが交わされ、描画行為が変容・持続されるのかを検討することが求められる。

第4に、第2章Dの国内の実証研究においては、描画条件を観察者が統制した場面での研究手法や一斉活動場面での描画活動を対象にした研究が多く、幼児が自然発生的にどのような関係性の他児と、どのように描画活動に取り組み、そこでいかなる関わりを展開させているのかという点に関しては、十分に明らかにされていないといえる。研究者が日常の保育実践に参加し長期的に観察を行う参与観察のアプローチにより、日常の保育の中で営まれる幼児の描画活動の構造を捉える必要があるだろう。今後、日常の保育の文脈に即

した、幼児の描画表現や描画行為に関する研究が求められる。

引用文献

- 秋田喜代美 2016. いま「保育」を考えるために 山邊昭則・多賀 巖太郎編著 秋田喜代美 監修 あらゆる学問は保育につながる 発達保育実践政策学の挑戦, 東京大学出版会, 1-14.
- Anning, A., & Edwards, A. 1999. Promoting children's learning from birth to five. Buckingham, UK: Open University Press.
- Anning, A. & Ring, K. 2004. Making sense of children's drawings. Maidenhead, UK: Open University Press.
- Arnheim, R. 1954. Art and visual perception: A psychology of the creative eye. Berkeley: University of California Press. (波多野完治・関計夫 訳 1964. 芸術と視覚・美術と創造の心理学上, 美術出版社.)
- 馬場結子 2014. 絵本の読み聞かせによる子どものイメージの形成について—子どものアート遊びを通して—, 淑徳短期大学研究紀要, 53, 167-183.
- Brooks, M. 2009. Drawing to learn. In Narey, M. eds. Making meaning: Constructing multimodal perspectives of language, literacy, and learning through arts-based early childhood education, 2, 9-30. New York: Springer.
- Callaghan, T. 1999. Early understanding and production of graphic symbols. Child Development, 70(6), 1314-1324.
- Coates, E. & Coates, A. 2006. Young children talking and drawing. International Journal of Early Years Education, 14(3), 221-41.
- Costall, A. 1995. The Myth of the Sensory Core: The Traditional Versus the Ecological Approach to Children's Drawings. In Lange -Kuettnner C. & Thomas G. V. eds. Drawing and looking: Theoretical Approaches to Pictorial Representation in Children. New York: Harvester Wheatsheaf.
- Cox, S 2005. Intention and meaning in young children's drawing. International Journal of Art and Design Education, 24(2), 115-125.
- Daniels, H. 2001. Vygotsky and Pedagogy. London: Routledge Falmer.
- Edwards, C., Gandini, L., & Forman, G. eds. 1993. The hundred languages of children: The Reggio Emilia approach to early childhood education. Norwood, NJ: Ablex.
- 藤原逸樹 2009. 描画活動における子どもの発話の聞き取りに関する一考察, 美術科教育学会誌, 30, 345-356.
- Gardner, H. 1982. Art, mind, and brain. New York: Basic Books. (仲瀬 久・森島 慧訳 1991. 芸術精神そして頭脳 黎明書房.)
- Gibson, J. J. 1986. The Ecological Approach to Visual Perception. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. (Original work published 1979) (古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬 旻 訳 1985. 生態学的視覚論, サイエンス社.)
- Göncü, A. 1993. Development of intersubjectivity in the dyadic play of preschoolers, Early Childhood Research Quarterly, 8(1), 99-116.
- Goodman N. 1978. Ways of Worldmaking, Hassocks: The Harvester Press. (菅野盾樹・中村雅之訳 1987. 世界制作の方法 みすず書房.)
- 濱田幸代・堂野恵子 2017. 絵本の読み聞かせが年少幼児の描画発達に及ぼす効果, チャイルドサイエンス, 14, 29-32.
- 花篤實 監修 1999. 幼児造形教育の基礎知識, 建帛社.
- 花篤實・岡田愨吾 編著 2009. 新造形表現 理論・実践編, 三晃

- 書房.
- Hope, G. 2008. Thinking and learning through drawing. London: Sage.
- Hopperstad, M. H. 2008. Relationships between children's drawing and accompanying peer interaction in teacher initiated drawing sessions. *International Journal of Early Years Education*, 16(2), 133-150.
- 堀田由加里 2018. 5歳児描画活動における他児の応答行為に関する分析—描画活動に参加する人数とテーマの共有性に着目して一, *国際幼児教育研究*, 25, 107-122.
- 堀田由加里 2019a. 5歳児の描画活動における他児への応答行為に関する縦断的検討—仲間関係の形成との関連性に着目して一, *美術教*, 303, 16-25.
- 堀田由加里 2019b. 保育における他者関係と描画表現の相互的な変容過程についての検討: 他児との関わりが少ない5歳児に着目して, *子ども学*, 7, 162-180.
- 堀田由加里 2019c. 幼児の描画活動における即興的創発過程: 5歳児クラスの描画場面における描画フレームに関するやり取りと描画表現の展開過程に着目して, *保育学研究*, 57(1), 17-28.
- 岩田誠 1997. 見る脳・描く脳, 東京大学出版会.
- Kellog, R. 1969. Analyzing children's art, National Press Books. (深田尚彦訳 1979. 児童画の発達過程, 黎明書房.)
- Kolbe, U. 2005. It's Not a Bird Yet: The Drama of Drawing. Byron Bay: Peppinot Press.
- Kress, G. 1997. Before writing: Rethinking the paths to literacy. London, UK: Routledge.
- Kress, G. 2003. Literacy in the new media age. London, UK: Routledge.
- Kukkonen, T. & Chang-Kredl, S. 2018. Drawing as social play: Shared meaning-making in young children's collective drawing activities. *The International Journal of Art and Design Education*, 37(1), 74-87.
- Luquet, G.H. 1927. *Ledessinenfdntin Paris: Aican*. (須賀哲夫訳 1979. 子どもの絵—児童画研究の源流, 金子書房.)
- Mackenzie, N. 2011. From drawing to writing: What happens when you shift teaching priorities in the first six months of school? *Australian Journal of Language and Literacy*, 34, 3, 322-40.
- Matthews, J. 1999. *The art of childhood and adolescence*, London: Falmer Press.
- Matthews, J. 2003. *Drawing and painting: children and visual representation*. London: Paul Chapman Publishing.
- 文部科学省 2008. 幼稚園教育要領, フレーベル館.
- Nixon, D. & Adwinkle, M. 2005. *Exploring: Child development from three to six years* (2nd ed.). Australia: Thomson Learning.
- 大橋功 2014. 幼児の想像的描画表現活動における共感性の働きについて: 共感性の多次的視点からの考察, *美術教育*, 298, 16-24.
- 大橋麻里子 2016. 幼児の生活画の活動における保育者の援助に関する研究: 導入時の援助の方略とその意図の分析を通して, *美術科教育学会誌*, 37, 161-177.
- 太田素子・浅井幸子・福元真由美 編著 2014. 戦後幼児教育・保育実践記録集 第I期表現する子ども—幼児の知性と人格発達へのまなざし, 日本図書センター.
- 奥美佐子 2012. 描画過程における子ども間の模倣の研究: 模倣を創造へ導くために, *神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇*, 1, 61-73.
- Papandreou, M. 2014. Communicating and thinking through drawing activity in early childhood. *Journal of Research in Childhood Education*, 28(1), 85-100.
- Parsons, M. 1998. Review of Child development in art. *Studies in Art Education*, 40(1), 80-91.
- Piaget, J. 1956. *The child's conception of space*. New York: Macmillan.
- Pinto, G., Gamannossi, B. A., & Cameron, C. A. 2011. From scribbles to meanings: Social interaction in different cultures and the emergence of young children's early drawing. *Early Child Development and Care*, 181(4), 425-444.
- Poland, M. & van Oers, B. 2007. Effects of schematizing on mathematical development. *European Early Childhood Education Research Journal*, 15(2), 269-293.
- Rogoff, B. 2003. *The cultural nature of human development*. New York: Oxford University Press.
- 佐藤公治・長橋聡 2009. 幼児の描画に見る内在的表現行為 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 107, 1-23.
- 島田由紀子 2014. 幼児の図形からの見立て描画に見られる初発反応, *和洋女子大学紀要*, 54, 97-108.
- Soundy, C. S. & Drucker, M. F. 2010. Picture partners: A co-creative journey into visual literacy. *Early Childhood Education Journal*, 37, 447-460.
- Thomas, G.V. & Silk, A. J. 1990. *An introduction to the psychology of children's drawings*. London: Harvester Wheatsheaf. (中川作一訳 1996. 子どもの描画心理学, 法政大学出版局.)
- Thomas, M. 2005. *Comparing Theories of Child Development*. Belmont, CA: Wadsworth Publishing.
- van Oers, B. 1997. The narrative nature of young children's iconic representations: Some evidence and implications. *International Journal of Early Years Education*, 5(3), 273-245.
- 上野行一 1995. 美術教育と「みたて」の作用 1, *美術教育学*, 16, 39-49.
- Vygotsky, L. S. 1976. Play and its role in the mental development of the child, in Cole M. eds. *Soviet Developmental Psychology: An Anthology*. New York: Sharpe, 76-99.
- Wallon, P., Cambier, A. & Engelhart, D. 1990. *Le dessin de l'enfant*. Press Universitaires de France. (加藤義信・日下正一訳 1995. 子どもの絵の心理学 名古屋大学出版会.)
- 若山育代・岡花祈一郎・一色玲子・淡野将太 2009. 5歳児の協働描画の成立要因に関する一考察: 非再現的表現「お化けトラック」を取り上げて, *学習開発学研究*, 2, 51-60.
- 若山育代 2008. 幼児の見立て描画における言葉かけ研究の意義と展望, *広島大学大学院教育学研究科紀要*, 1, 57, 59-67.
- Wood, E. & Hall, E. 2011. Drawings as spaces for intellectual play, *International Journal of Early Years Education*, 19, 3-4, 267-281.
- Wright, S. 2007. Graphic-narrative play: Young children's authoring through drawing and telling. *International Journal of Education & the Arts*, 8(8), 1-27.

(指導教員 秋田喜代美教授)